

正切正銘の悪人

一、

甲「先生、私はお説教のお座に出た時は喜ばれますが、家に帰ればすぐ喜びがなくなります。」

乙「それがどうしましたか。」

甲「どうもありませんが、これではだめだ、これではほんものの信心ではないと思われ
ます。」

乙「聞き不足です。まだまだ如来がわかっていません。わが機が見えていません。」

甲「それでは喜ばないでもいいのですか。」

乙「それはあなたのはからいです。」

甲「それでは喜ばないでもいいのですか。」

乙「それもあなたのはからいです。」

甲「わかりません。いよいよわかりません。」

乙「あなたが仏に生きないで、仏が煩惱なくしては生きられないことに徹しなさい。」

二、

甲「先生、私は聞けば聞くだけ悪い心です。困ったものです。」

乙「私もそのとおりです。」

甲「先生もですか。ですが、先生の悪人と私とは違います。私は正切正銘の悪人で
す。」

乙「私もそのとおりです。南無阿弥陀仏。」

甲「悪人でもよいのですか。」

乙「よい悪いじゃない。事実です。見れば見るだけ悪人なのです。」

甲「善人になりたいのです。」

乙「それごらん、あなたの方が私よりも善人です。善人になれる、なりたいと思つて
いられるほど私より善人です。善人が助かるのが十九願で、悪人が助かるのが十八
願です。それがほんとに私のものになると、悪人ならこそ、おちつけるのです。」

三、

甲「私は如来の本願は真実だと思います。ですが、私の信心がぐらつきます。どうな
のでしょうか。」

乙「如来の本願と、あなたの信心と、二つならべたい心が自力です。」

甲「信心はいらぬのですか。」

乙「信心とは、至心、信樂、欲生と如来のご本願のことです。本願が信心です。」

甲「その本願の信心が頂けないのです。」

乙「本願は、あなたが、信心をかためてから、本願が生きるのではないのです。徹頭
徹尾本願のみこころに救われるのです。あなたが本願に救われようともがくの

はなくて、本願があなたを如来の内容にするのです。撰取するのです。ちよつとその仏の心のほんとうを聞きなさい。聞いたその機もお返しなさい。」

四、

甲「私は、如来じゃ仏じゃと、そんなものはないと思います。」

乙「ああそうですか。」

甲乙「……………」

甲「先生どうですか。私の考えは？なぜ黙っていなさるのですか。」

乙「おかしな人ですね。あなたは仏はないとおっしゃるから、そうですかと聞いていただけです。それに、どうですかとは、おかしい人です。」

甲「先生には仏はあるのですか。」

乙「あるもないも、有無さえ問題になりません。仏がなければ、私の一切が無で、暗黒で、無意義で、とにかく私の生活一切がないのですから。」

甲「それでも、僕には仏がなくても生活はあります。仏を信じないでも別に不都合はありません。」

乙「あなたのことは私にはわからない。」

五、

甲「先生、さつぱり世の中が悪化していきませんね。だいたい寺参りをしている奴にもろくな奴はいませぬ。」

乙「世の中が悪化したか知らんが、あなたは悪化しませんか！ 寺参りがろくな奴でないというあなたこそ、ろくな奴ではないのでしよう。釈尊は正覚成就の時『奇しきかな奇しきかな。一切衆生、如来の智慧徳相を具す』とあきれたそうです。ろくな奴はいないと見る眼こそ、もう一度考えるとお恥ずかしいことではありませんか。」

六、

甲「先生、あれだけ長年聞かしてもらうのに、私にはどうしてもみ教えが私に生きてきませぬ。」

乙「それはおめでたいことです。」

甲「ちつともおめでたいことではありません。」

乙「おめでたいことです。私は一切の教えが皆生きて卒業しました、と言われたら、それこそたいへんです。大海につけた竿の長さを、大海の深さだと決めてはなりません。底のない煩惱と、底のない仏心ですもの。一丈の尺で量って合点がゆかねば、十丈の尺で量ってごらん。深さのないことは同一です。」

七、

甲「先生、私の地方では先日、犬神が食いついて、人が死にました。寺参りはした人ですが、こんなのはどうでしょう。」

乙「犬神という悪魔に食われたと思う人も、そんなものがあるとと思う人も、食いつかれた人も、（もつとも、熱病などでたわごとを言うのを、側の者が間違えたのなら別）十八願の信の智慧のない人の迷いです。十八願の信に生きた人にはないことです。」

八、

甲「先生、聞いても聞いても聞き飽かぬことです。」

乙「そうです。伯耆の妙好人、榊井の老婆は、「聞けば足りませんし、聞かずにいると余りますし」と申されました。心でも体でも、達者なものは困ったものです。いくらでも食いますから。胃病人だとお粥でも嘔吐します。ある村の信仰卒業生は、光明団の話を聞いて『やれやれ、お前らはあのむつかしい話を聞くのか。俺は涙がこぼれた。蓮如様のもやすいご教化があるのに。』と申されたそうです。たしかに一本参りました。ですが、さきの伯耆の榊井の妙好人は、七十四歳の老婆で、それに盲目ですが、ある時、女学校の生徒への話の後、『今日は生徒さんたちへのお話で、この婆にはわからんかと思いましたが、この婆が一人でよばれました。』と申されました。このお方のお手をとっていつもいつしよに来られるのが中島のおばあさん。六十何歳ですが、いずれおとらぬ尊い方で、東伯支部へ行つたたびにご縁に会っています。我という胃癌が出て来ると、何もかも食べられなくなります。」

九、

乙「あなたは今何を考えていましたか。」

甲「先生、私は心の中に、弁円も、提婆も、強盗も、いやはやさまさまな奴が出て来て、ものをいうので、じつと聞いていてやりました。」

乙「それはそれは。」

甲「昔は、こんな奴が一匹も出て来ないようにならう、出て来てはいけなと思うていましたのに……………」

乙「なるほどなあ。ずいぶん人間も贅沢なものです。自分一人が、清浄に、安楽になろうなんて。お気の毒にも六つの窓があいていて、泥水が出たり入ったりします。一切衆生からはなれて、自分だけをきれいにしようなど、よほど小乗的なものですね。一生かかつて、千客万来、によこによこ出る奴の言うことを聞いてやりましょう。南無阿弥陀仏。」